

Thinking 住宅地盤—住宅地盤をどう捉えるか

メゾン・ド・フランス 代表建築家 吉田真澄

私が3年間建築家として設計活動したフランス・パリでは、中世から19世紀初めの木構造の建築が街区の景観を形成しており、今も大切に使われている。在仏中、地震は怖い？と尋ねられることはあっても、敷地の地盤について話題に上ったことは記憶にない。フランスでは地震がなく、堅い地盤であるからかもしれない。設計者の地盤に対する認識は、地震国日本とフランスでは大きく異なるようである。

日本での住宅の設計活動では、主としてスウェーデン式サウンディング試験により地盤の状況を判断し、基礎の形状や地盤改良の必要性などの検討をしている。自ら敷地周辺を歩いて地形を観察し、大きな地質地盤をつかむことも大切にしている。

日頃は、建て主の立場で進めているとあってよいと思うが、2009年に住宅の地盤について客観的に考える機会を持った。

渋谷区内（東京）の昭和56年以前に建設された木造住宅約1万戸を対象とした、耐震化促進調査への参加である。区から委託を受けた日本建築家協会の渋谷区在勤会員である私は、調査方法の策定、調査書の作成から報告書をまとめるまでのコアメンバーとして加わり、実際に調査員として350戸あまりの家を1軒1軒訪ねて評価を行った。

調査では、対象住戸について建物や基礎の外観評価だけでなく、敷地地盤についても行った。状況を目視で観察し、各項目について点数をつけ、戸別に危険度の総合評価を行い、渋谷区の危険度マップを作成した。調査時は、在住者にアンケートをお願いし、耐震への関心を呼びかけるリーフレットに言葉を添えて手渡しをした。

この経験でわかったことは、確かに老朽化した建物について、戸別の耐震性を高めることは必要であるけれども、地盤の安全度の認識の大切さである。

担当した地区は、急斜面の崖が多く存在し、崖の切り土面の保護・擁壁が不十分なところもあって地震時の地盤の安定性が懸念された。谷地は、川や沼の埋地、崖直下の敷地などに地震時の深刻な影響が心配され、崖に接近して建つ崖上の住宅にあっては、建設関係者の常識を疑いたくなる住宅も多く存在した。建て主の希望やコストを最優先したあまり、リスクに目を閉じた所以であろう。

住宅設計に関わる建築家は、建て主と一緒に住宅地盤を考えていくだけでなく、専門知識を活かして、行政や住民とともに防災まちづくりに取り組むことが必要と考えている。